

# 箱に入った男

## アントン・チェーホフ

翻訳：増子貴子、川北巖己

ミロナシーツコエ村の一番外れにある村長プロコーフィの納屋に、帰り損ねた猟師たちが泊まっていた。猟師たちは、たったの2人だった。獣医のイワン・イワーヌィチと中学校教師のブルキンだ。イワン・イワーヌィチは、だいぶ変わった苗字を2つ持っていて、チムシヤ=ギマライスキイというのだが、この苗字が全くもって彼に似つかわしくなかったため、彼は県中の人から単に名前と父称で呼ばれていた。イワン・イワーヌィチは町のはずれにある養馬場で暮らしており、今回は綺麗な空気を吸いたくて猟へとやってきたのだ。中学校の教師であるブルキンは、毎年夏はP伯爵のところに滞在し、この地ではだいぶ昔から地元民としてとおっていた。

二人は眠れなかった。イワン・イワーヌィチは長身で痩せぎすの年寄りで、長い口髭をはやしており、戸口の外に腰を下ろしてパイプをくゆらせていた。彼を月明かりが照らしていた。ブルキンは納屋の中の干し草の上に横になっていたが、暗闇の中では彼の姿は見えなかった。

色々な話をした。ついでながら、村長の奥さんであるマーヴラの話になった。健康で賢そうな女性で、これまで生きてきて、生まれ故郷の村以外の場所へ行ったことがなく、都会も鉄道も見たことがないのだが、ここ10年はずっと暖炉の前に座ったままで、外出するのは深夜になってからだけだった。

「珍しいことでもないでしょう」とブルキンが言った。「もしかしたら、ヤドカリやカタツムリのように自分の殻に逃げこもうとする孤独な性格の人は、この世には少なくないかもしれません。もしかすると人類の祖先がまだ社会的動物ではなくて自分の穴倉の中で暮らしていた時代への先祖帰りであるかもしれませんし、ただ単に変わり者の中にはこういう人もいるとは言えるだけかもしれません。誰にそんなことが分かるでしょう？」

自然科学者じゃないんで、こういう問題に触れるのは柄ではないが、これだけは言っておきたい。こういうマーヴラのような人間は、珍しくはないとね。卑近な例でいうと、こんなものがあるんです。2ヶ月ほど前、我々の町でベーリコフという男が亡くなりました。ギリシャ語の教師で、私の同僚でした。ベーリコフについては、もちろん聞いたことがあるでしょう。彼の特筆すべき点は、どんなにいい天気でも、常にオーバーシューズを履いて傘を持ち、必ず綿入りの暖かいコートを着ていたことです。傘はケースに入っていて、時計も灰色のスエードのケースに収められていましたし、鉛筆を削るためのペンナイフを取り出したときも、そのナイフまでケースに収められていました。顔だって、ケースに収められているかのようでしたよ。

なにせ、いつも襟を立てて顔を隠していましたからね。色眼鏡をかけて、綿入りの刺し子のジャケットを着込み、耳に綿を詰め、幌馬車に乗るときなどは幌をかけるよう命じていましたよ。

要するに、この人には、常に必死になって自分を覆い、自分を隔離して、外の影響から守ってくれる「箱」を作り上げようとするきらいが見受けられたのです。現実によって自分が揺るがされたり、驚かされたり、常に不安にさせられたりしていて、おそらくは自分の臆病さや現実への嫌悪感を正当化するためなのでしょうが、ベーリコフはいつも過去や、これまで起こったことの無いことを賞賛していたのです。ベーリコフが教えていた古代の言語は、実際のところ、彼にとって自分が現実の生活から身を隠すオーバーシューズでありこうもり傘だったのです。

「ああ、ギリシャ語はなんて響きが良く、綺麗なんだろう！」と彼は甘美な表現を用いて語っていました。そして自分の発言を証明するかのように、目を細めて指を立て「アーントロポス！」と発音していました。

ベーリコフは、自分の考えまでもケースに仕舞いこもうとしていたのです。彼にとって明快なこととは、何かを禁じる内容の通達や新聞記事だけなのです。通達により夜9時以降の生徒たちの外出が禁じられたり、何かの記事で肉欲的な愛を禁じていたりすると、それは彼にとって明快なことだし、疑いようのないことでした。禁止されている、それで十分なのです。許可だとか認可に込められているものは、ベーリコフにとっては常に疑わしく、何かが伏せられているかのようで、不明瞭なことなんです。町で演劇サークルや閲覧室、喫茶店が許可されると、彼は首を振って小声でこう言うのです。「そりゃ、もちろん、いいものだろうが、何か面倒なことにならなきゃいいがと思ってね。」

どんな規則であれ、そこからの違反や逸脱、放棄は、自分とは関係のないことであっても、彼の気を滅入らせるんです。もしも仲間の誰かが祈祷式に遅れたとか、ギムナジウム生徒の何かしらのいたずらの噂が耳に入るとか、女性陣が夜遅くに将校と一緒にいるのを見つけたとかした場合、ベーリコフはたいそう興奮して、「面倒なことにならなければいいが」を連発していました。教育審議会においては、ベーリコフはその用心深さと猜疑心を発揮し、この頃ギムナジウムの生徒は男女を問わず素行が悪く教室で騒いでいるのだという、すっぽり箱に収まった意見を述べて我々を圧迫していました。「ああ、上司の耳に入ったらどうしよう、面倒なことにならなければいいが。」「もしも2年生からペトロフを、4年生からエゴーロフを退学させられたらどんなに良いだろう。そうしたら？」ベーリコフはため息をついて愚痴をこぼし、青白くて小さな顔、そう、イタチの子みたいなあの顔に載せた色眼鏡で、我々皆を圧迫し、とうとう我々は屈してしまい、ペトロフとエゴーロフの素行に関する評価を下げ、謹慎させ、最終的にはペトロフもエゴーロフも退学させてしまったのです。

ベーリコフには変わった習慣がありました。我々の自宅アパートを訪ね歩いていたのです。教師のアパートにやってくると、座りこみ、まるで監視しているかのように黙っているんです。そうして黙ったまま1時間から2時間座り込み、その後去って行くんです。彼はこれを

「同僚たちと良い関係性を維持するため」と言っていました。どうやら、ベリコフにとっても、我々の部屋を訪ねて座ったままなのは気が重いことだったようなので、彼が我々を訪ねてくるのは、すなわちそれが同僚としての自分の義務だと見なしていたからに他なりません。我々教師は、彼が怖くてね。校長だって怖がっていましたよ。おそらく、我々教師というのは皆、知的で極めて真面目だし、トゥルゲーネフやシェドリンを手本に教育されていますが、なのにいつもオーバーシューズを履き、傘を持ち歩いているこの男が、中学校全体を丸15年も牛耳っていたんです！中学校だけでしょうか？いえ、町全体をですよ！町のご婦人はベリコフに知られるのを恐れて、土曜日にやっていた内輪のお芝居を開催しなくなりました。聖職者たちも、ベリコフの前では、精進料理でないものを食したり、カードをやるのは憚られました。こういうベリコフのような人間の影響下で、この10年、いや15年間、我々の町はあらゆることを恐れるようになったのです。大きな声を出して読書をする、手紙を出すこと、知り合いになること、読書することを恐れ、また貧しい人を助けることや読み書きを教えることも恐れているのです。

イワン・イワーヌィチは何か言いたくなって咳払いをしたが、まずはパイプを吸い付け、月を見つめ、それから間を置いて次のように言った。

「ああ、あの町の知的で実直で、シェドリンやツルゲーネフボクレーイなど色々と読んでいる人たちが、従属して我慢をしていたのですね・・・まさしくそう、そういうことですよ。」

「ベリコフは私が住んでいたのと同じ建物に住んでいました。」とブルキンが話を続けました。一同階の向かいに住んでいたので我々はよく顔を合わせていて、私は彼の家での過ごし方を知っていました。家でも同じような調子でした。部屋着、部屋用の帽子、雨戸、かんぬき、あらゆる禁止や制限の連続でした。「ああ、面倒なことにならないければいいが！」精進料理を食べるのは身体に障るが、たぶんベリコフは精進をしていないと言われるからそれ以外を食べるわけにもいかない。ベリコフは牛のバターをかけたスズキを食べていたそうです。精進料理ではないけれど、精進料理ではないとも言えないように。

不道德と思われることを恐れて女中を雇わず、代わりにアフナーシイという料理人を雇っていました。60くらいの、酔っ払いで気狂いじみた老人で、かつては従卒をつとめ、料理くらいはどうかできたんです。このアフナーシイはいつもドアのところで腕を組んで立っていて、ため息をつきながらいつも同じことを呟っていましたよ。

「全く、近頃はああいう奴らが増えちまって！」

ベリコフの寝室は小さくて、まさに箱のようでしたし、ベッドは天蓋付きでしたよ。床につくと、頭からすっぽりくるまるんです。暑いし蒸し蒸しするし、閉じているドアというドアに風が当たってガタガタいうし、暖炉はゴゴ音を立てるんです。台所からはため息が聞こえてくる、不気味なため息がね...なのに、ベリコフは毛布の中にも怖がっているんです。何か起きやしないか、アフナーシイに切り殺されやしないか、泥棒におしいられるのではないかと恐れ、その後一晩中不安になるような夢を見るんです。朝に、皆と出勤するとき

は気分が晴れない様子で、青白い顔をしていたし、今向かっている、人のたくさんいる中学校を恐ろしがり、あらゆる存在と敵対しているかのように見えたし、孤独を好む性格の彼にとって、私と一緒に通勤するのも辛そうでしたよ。

「うちのクラスは大変に騒がしいのですよ。」とベーリコフはまるで自分の気の重さに対する弁明を探すような調子で語っていました。「うちのクラスみたいなクラスはありませんよ。」

このギリシャ語教師が、この箱に入った男が、あと少しで結婚するところまで行っていたなんて、貴方に想像できましようか？

イワン・イワーヌィチは素早く納屋の方を振り返って、こう言いました。

「御冗談を！」

「ええ、相当可笑しいことだと思われるでしょうが、もう少しで結婚するところだったので。うちのギムナジウムへ、ミハイル・サーヴィチ・コヴァレンコとかいう、ウクライナ人の新しい歴史学と地理学の教師が任命されてきたのです。コヴァレンコは単身ではなく、姉のワーレンカを伴ってやってきました。コヴァレンコは若く、背が高く、浅黒く、手がとても大きく、声が低そうな顔をしていて、実際その通り、樽から出てくる「ブンブンブン」のような声の持ち主でした。一方、ワーレンカは30がらみでもう若くはなかったものの、同じく背が高くすらっとして眉は黒く、頬の赤い女性でした。要するに、生娘ではなくマーマレードのように色々と煮詰まった大人の女性で、いつもウクライナのロマンスを歌ってげらげらと笑うような快活で騒がしい人でした。何かあると、良く通る笑い声を上げるのでした。「ハッハッハ！」確か、我々が最初にきちんとコヴァレンコと知り合いになったのは校長の名の日のお祝いでのことでした。

名の日のお祝いに義理でやって来ている、厳格でどこもなく面白みもない教師たちの中で、我々は泡から誕生した新たなアフロディーテを目の当たりにしたのです。彼女は両手を腰に当てながら歩き回ったり、大笑いをしたり、歌ったり民族舞踊を踊ったり...感情を込めて『風吹き荒ぶ』を歌いあげたあとも、次から次へとロマンスを歌い、我々全員を虜にしていきました。全員ですよ、ベーリコフさえもね。ベーリコフは彼女の近くに座ると、にんまり顔でこう言ったんですよ。「ウクライナ語の持つ柔らかさと心地よい響きは古代ギリシャ語を彷彿とさせますなあ。」とね。

このお世辞によって、彼女はベーリコフに対して感情を込めて熱心に話しかけ始め、ガジャチスキー郡に個人の農場を持っていること、その農場には母が暮らしていること、そこではこんな洋梨だの、メロンだの、瓜だのができるんだなどと話して聞かせるのです！ウクライナ人は、瓜のことをカバークと呼び、ロシア語のカバーク（居酒屋）のことをシンキと呼ぶのだとか、あちらのボルシチは赤いものと青いものを入れて煮るのだそうで、「ほんとにびっくりするくらい、すごくすごく美味しい！」と言うのです。耳を傾けていた我々に、不意にある考えが浮かんだのです。

「この2人、結婚すればいいんじゃないかしら？」こっそり校長夫人が私に耳打ちしました。

私たちはなぜかベリコフが独身だということを思い出し、今となってはこれまでなぜかこんなに重要な情報に気を留めずに、失念していたことがおかしいことだと思ったのです。一体、彼はどんな女性観をもっているのか、この問題に対する解をどう求めようとするのか？これまで、我々はこのことに全く関心がありませんでした。恐らく、私たちはこのどんな天気でもオーバーシューズを履いていて、天蓋のついた寝台で寝ている人間が恋をするなんてありえないと思っていたのでしょう。

「ベリコフはもう 40 を過ぎているけれど、ワーレンカは 30 歳・・・」と校長夫人は自分の考えを説明しました。「私、ワーレンカはベリコフと結婚するんじゃないかと思うのです。」

退屈しのぎとなれば我々が田舎ではなんでも起こりましたし、不要で無意味なことでも何もありだったのです。それというのは、本当に必要なことは全くきちんに行われなからですよ。奥さんがいるなんて想像さえできないベリコフを、急に結婚をさせる必要などあったんでしょうかね。校長夫人や視学官夫人をはじめとする、中学校の女性陣は、突如として生きる目的を見つけたかのように生き生きし始め、若返ってしまっただけです。校長夫人は劇場の敷席を押さえて、様子を見守りました。敷席では、ワーレンカが扇などを広げつつ、喜びで輝き幸せそうなのに、一方で隣にいるベリコフは、やっどこ家から引っ張り出されたかのように、縮こまって小刻みに震えていましたよ。私が夜会を催すと、ご婦人たちが絶対にベリコフとワーレンカを招待してちょうだいと言ってくるんです。要するに、お膳立てをし始めたわけですよ。ワーレンカのほうは、結婚に異存はないようでした。弟さんとの暮らしはあまり面白くはなかったのか、一日中口喧嘩をしたり怒鳴り合っただけでした。こんな感じでしたよ。がっしり体型の背の高いコヴァレンコが通りを歩いている。刺繍をあしらったシャツを着て、帽子の下から額に前髪を下ろしていた。片方の手には本の包みを、もう片方の手には太く節の多いステッキを携えているんです。

彼の後ろから姉が歩いてついてきているのですが、これまた本を持っています。

「ねえ、ミハイル坊や、本は読んでいなかったのでしょうか！」とワーレンカが大声でけしかけます。「私、誓いを立てられるくらいの自信を持って言うけれど、この本はちっとも読んでいないんですよ！」

「僕は姉さんに言っているじゃないか、読んでいたよ！」コヴァレンコは歩道にステッキの音を響かせながら叫びます。

「ああ、ミハイル坊や、なんてこと！普通のことを言っているだけなのに、どうして腹を立てているの？」

「姉さん、読んだって言っているじゃないか！」コヴァレンコはさらに大きな声で叫びます。

一方自宅では、誰かがやってくるとすぐ口喧嘩が始まるのでした。たぶんワーレンカは、こんな生活にうんざりしていたでしょうし、彼女のお年頃を考えれば自分の居場所も欲しかったことでしょう。その頃は、相手を品定めする時間などなく、ギリシャ語教師でもいいからだれか都合の良い人に嫁ごうと考えていました。そして多くのお嬢さんにとっては、結婚さえできれば誰と結婚しても良かったのです。ベリコフがどんな男であろうと、ワーレンカは我らがベリコフに大っぴらに好意を示すようになりました。

ではベリコフの方はどうだったのでしょうか？ベリコフはコヴァレンコのところにも、我々と同様に顔を出していました。コワレンコのもとへやって来て、座り込み、ダンマリなんです。ベリコフは黙っているんですが、ワーレンカは『風吹き荒ぶ』を歌って聞かせたり、黒い瞳でものを思わしげに見つめたり、そうかと思えば「ハ、ハ、ハ！」と急に笑い出すんですよ。

恋愛問題、とりわけ結婚においては、忠告の言葉が大きな役割を果たすものでしてね。同僚たちも女性たちも、皆がベリコフに対し、結婚はするべきだとか、あなたが人生でやり残していることは結婚だけだと言って説得し始めました。皆が皆、彼にお祝いの言葉を述べたり、もったいぶった顔をして「結婚は重要な門出だ」などと色々つまらない事を言うんです。加えて、ワーレンカはなかなかの美人で魅力的だったし、5等文官の娘で、個人の農場も持っているし、なにより重要なのはベリコフに対して優しく、暖かく接した初めての女性でしたからね。ベリコフは頭がくらくらして、本当に自分も結婚しなければと心に決めたわけです。

「そうしたら、あとはオーバーシューズと傘を取り上げりゃいいわけだ。」と、イワン・イワヌイチは言った。

「ところが、それは無理だとわかったんです。

彼は机の上にワーレンカの肖像画を置いて、いつもワーレンカの話や家庭生活の話、結婚は重大な一歩だなどと話をしに私のところへ来ていたし、頻繁にコワレンコのところにも通っていたものの、暮らしぶりを一切変えなかったんです。むしろ逆に、結婚するという決意が、彼にはどういう訳か病的に作用しましてね、痩せ細って、血の気も失せて、一層自分の殻に閉じこもっていくかのようでしたよ。」

「ワルワラさんのことは気に入っていますとも。」と、ベリコフは若干引きつった笑みを浮かべながら私に言うんです。「それに、結婚することが人間にとって不可欠だということもわかってやいますよ...しかし、こう全てのことが一気に起こってもねえ...ちょっと考えなきゃならんでしょう。」

「何を考えるっていうんです？」と、私は聞きましたよ。「結婚すれば、それで終わりじゃないですか。」

「いや、結婚は重大な一歩なんだし、まずは近いうちに起こりうる義務や責任についてあれこれ検討せねば...何か面倒なことにならんようにね。

これが本当に心配で、今じゃ夜も眠れません。それに、正直なところ、怖い。彼女も弟さんも、何だか変わった考え方をするし、知ってのとおり、何か変なことを話し合っているし、性格は大変せっかちです。結婚した後で、もしかしたら、何らかの面倒事に巻き込まれるかもしれませんし。」

こうして彼はプロポーズもせず、ずっと引き延ばしていたので、校長夫人やご婦人たちは酷くやきもきしました。近いうちに起こりうる義務や責任についてずっとあれこれ考えている一方

で、ほぼ毎日ワーレンカと散歩をしていたわけですが、恐らくはこれが自分の立場上そうしなければならぬと考えていたからでしょうね。そうして、私のところへ家庭生活について話にやって来ていました。十中八九、最終的にベーリコフはプロポーズをさせていただこうし、侘しさや手持ち無沙汰ゆえに結ばれている何千もの無用で愚かな結婚が、もうひと組誕生したでしょう。突如として、大事件さえ起こらなかったならね。

ワーレンカの弟のコヴァレンコは、最初に知り合った日以来ベーリコフを嫌っていて、彼を受け入れることはできなかったということを、言うておく必要があります。「分からないのです。」とコヴァレンコは肩をすくめて我々に言うていました。「どうやってあなた方がこの密告者、この汚らわしい顔を我慢しておられるかが分からないのです。えい、皆さん、ここに住んでいることなどできましようか！あなた方の吸っておられる空気は息苦しくて害のあるものですよ。あなた方は本当に教育者、教師なのですか？あなた方は小役人で、その抱えているものは学問の殿堂ではなく警察で、交番の中のような酸っぱい悪臭を放っているのです。いえ、皆さん、私はもう少し皆さんと過ごした後、うちの農場に帰り、そこでザリガニを捕まえたり、ウクライナ人の子供たちを教えたりするつもりです。私は帰ります、あなた方はここでユダと暮らして、勝手にすればいいでしょう。」

その一方でコヴァレンコは涙が出るほど、時には低い声で、時には甲高い声で笑いながら、両手を広げて我々に尋ねたものです。

「あいつはどうして私のところで座っているのですか？何があいつに必要なんですか？あいつは座って私を見てくるのです。」

コヴァレンコはベーリコフに「クモ野郎」というあだ名までつけていました。ですから、言うまでもなく、我々はコワレンコの前で、彼の姉のワーレンカが「蜘蛛野郎」のところへ嫁ごうとしているなどと話すことは避けていたのです。それであるとき、校長夫人がコワレンコに仄めかしたんです。お姉様は、ベーリコフのようにしっかりとした、誰もが尊敬する方と一緒にいればよろしいんじゃないかしら、とね。すると、コワレンコは顔をしかめて、ぶつぶつ言うのです。

「関係ないね。ママシ野郎とだろうと誰とだろうと結婚しちまえばいいし、俺は他人の問題に介入するのは大嫌いなんだ。」

さあ、話の続きはこうです。とあるいたずら者が風刺画を描きました。ベーリコフが、オーバーシューズを履き、ズボンをたくし上げ、傘をさし、ワーレンカと腕を組んで歩いている絵で、下部にあった題名は『恋するアンドロポス』でした。表情が、驚くほどの確に表現されてましてね。描いた人は、恐らく、これを一晩で仕上げたわけではなさそうでした。なにしろ、男子中等部や女子中等部の先生全員、神学部の先生方、さらには役人たちが、皆全員一部ずつその絵を受け取ったんですから。ベーリコフも受け取ったんですよ。風刺画は、ベーリコフにとって極めて衝撃的だったんです。

私たちは連れ立って家を出ました—それは丁度5月1日の日曜日で、教師と生徒がジムナジウムに集まってから一緒に徒歩で郊外の林に行く予定になっていたのです。出発の際、ベアリコフは青ざめて、雨雲よりも暗い表情をしていました。

「なんてひどい奴がいるもんだ！」とベアリコフが言うと、彼の唇が震え始めました。

私はベアリコフのことを気の毒にさえ思い始めました。歩いていると、突然、想像できますでしょうか、コヴァレンコが自転車で飛ばしてきて、その後ろについてワーレンカも自転車で、顔を赤くしてへとへとになりながらも明るく楽しそうな様子で飛ばしてきたのです。

「私たち、」とワーレンカは叫びます。「お先に行きますわね！こんなにも、こんなにもすばらしい天気なんですもの！」

そして2人の姿が見えなくなりました。うちのベアリコフは青ざめた顔色から青白い顔色に変わり、じっと動かなくなりました。立ち止まって私を見つめているのです・・・

「ちょっと待ってください、あれは一体何だったんですか？」とベアリコフが尋ねました。「ひょっとして、目の錯覚でしょうか？果たしてジムナジウムの教育者や女性が、自転車に乗るなんてふさわしいことでしょうか？」

「ふさわしくないことなどありませんか？」と私は言いました。「健康のために乗せておけばいいでしょう。」

「いえ、そんなことできますか？」とベアリコフは私の落ち着きようを揺さぶる勢いで叫びました。「何を仰っているのです！？」

そしてベアリコフはすっかり驚き、それ以上進む気になれずに家に帰ってしまいました。

翌日、彼は神経質に手をこすり合わせては震えていて、その表情からは体調が良くないことが見て取れました。そして彼の人生で初めて仕事を早退したのです。そして昼食も摂らないのです。しかし夕方近く、外は完全に夏の陽気だというのに、ベアリコフは厚着をして、ふらふらとコワレンコの家へ向かった。ワーレンカは不在で、弟だけがいました。

「どうぞおかけください。」とコワレンコは冷たく言い、眉をひそめた。コワレンコの顔は寝ぼけていて、食後の休憩を取ったばかりで、酷く機嫌が悪かったのです。ベアリコフは腰かけて10分ほど黙っていましたが、話し始めました。

「心の重荷を軽くするためにこちらに伺いました。私はね、それはそれは辛いのです。どこぞの風刺画家が私のことと、更に我々2人にとって近い女性のことを滑稽な姿で描いたのです。私はそのこととは何の関係もないと分かってもらうのが自分の義務だと思ひましてね...。こんな嘲笑される筋合いなどありませんし、むしろ常に十分きちんとした人間として振る舞ってきたのですから。」



コワレンコは、膨れっ面で腰掛けたまま黙り込んでいました。ベアリコフは、しばしの間、相手の出方を伺っていましたが、悲しげな声で静かにこう続けました。

「それと、もう一つあなたに話しておきたいことがあるんです。私は長年勤務しておりますが、あなたはまだ仕事を始めて間もないですから、先輩としてあなたに忠告しておくのが義務だと思ひまして。自転車に乗っていらっしやいましたが、あのお遊びは青少年の教育を担う者にとって非常に体裁の悪いことですよ。」

「一体なぜです？」と、コワレンコは低い声で尋ねました。

「まさか、これ以上の説明が必要なわけありませんよね、ミハイル・サーヴィチさん、これでもお分かりにならないのですか？教師が自転車に乗ったりしたら、生徒たちはどうすると思ひます？」

生徒たちは騒ぎまわるでしょうね！もしも通達で許可されていないなら、それはしてはいけないことなのです。昨日はぞっとしましたよ！お宅のお姉さまが目に入ったときには、めまいがしました。大人の女性あるいは若い娘さんが自転車に乗っているなんて—ぞっとする！」

「何を仰りたいんですか？」

「私が言いたいのはただ一つです—警告しておきますよ、ミハイル・サーヴィチ。あなたはお若い、未来がある、用心に用心を重ねて自分を律しなければならないというのに、なんとまあ、それを疎かにしていることか！まったく！あなたは刺繍入りのシャツを着て、いつも何とも知れない本を抱えて表を歩いている、そして今度は自転車にまで乗るとき。貴方とお姉さまが自転車を乗り回しているという話を校長が知ったら、その次は監督官の耳にも入りますよ。良いことなどあるでしょうか？」

「私と姉が自転車を乗り回していることは、誰にも関係のないことです！」とコヴァレンコは言い、顔を真っ赤にしました。「うちの家庭の問題に首を突っ込んでくる人などいまいしょうか、そんな奴、地獄に落としてやりますよ！」

ベアリコフは血の気が引き、立ち上がりました。

「あなたがそういう口の利き方をなさるなら、話を続けられませんね。」と、ベアリコフは言いました。「それに、二度と私の前で上役の方たちのことをそんな風に言わないでいただきたいですな。当局には敬意を持たなければ。」

「当局に対して、俺が何を悪く言ったって言うんですか？」と、敵意ある眼差しをベアリコフへ向けながらコワレンコは尋ねました。「頼むから、放っておいてくださいよ。俺は真っ当な人間なので、あなたみたいな人とは口を聞きたいとは思わないんです。告げ口屋は好きではないんでね。」

ベアリコフは感情が昂ってあくせくし始め、顔に恐怖の表情を浮かべつつ素早く身支度を始めました。なにしろ、こんな暴言を耳にしたのは彼の人生において初めてのことだったわけです。

「何をおっしゃろうと勝手ですが」と、ベアリコフは玄関口から階段の踊り場へ出ながら言いました。「あらかじめお伝えしておかなければ。我々の話が誰かに聞こえていたかもしれませ

るので、会話の内容を誤解されたり、何も問題が起きないように、我々の会話の内容をかいつまんで校長先生に報告せねばなりません。是非とも報告しなければ。」  
「報告するですって？行ってこい！何だって報告してこい！」

コヴァレンコがベリコフの襟元を後ろから掴んで突き飛ばすと、ベリコフはオーバーシューズの音を響かせながら階段を下まで転がりだしました。階段は高さがあって急でしたが、ベリコフは下まで傷を負うこともなく転がっていったのです。ベリコフは起き上がると、鼻に触れました。「眼鏡は無事だろうか？」しかし丁度ベリコフが階段を転がっているその最中に、ワーレンカが2人のご夫人と住宅に入ってきたのです。彼女たちは下で立ったまま様子を見つめていました。ベリコフにとってはこのことが何より辛く感じられました。笑いものになるよりは、首の骨なり両足なりを折っている方がよかったですと思いました。今にこのことが町中に、校長にも監督官にも知られることになるのですから。ああ、面倒なことにならない方がいいが！新しい風刺画が作られて、最終的には辞表を出せと迫られるのでしょう。

ベリコフが起き上がると、ワーレンカはその滑稽な表情、しわだらけのコートとオーバーシューズを見てベリコフだと分かったのですが、何があったのかは分からず、彼がうっかり階段から落ちたものだと考えて、こらえきれずに建屋全体に響く声で「ハッハッハ！」と笑い始めました。

この響き渡りよくとおる「は、は、は」という笑い声で、全ては終わったのです。ベリコフの結婚話も、世俗生活も。もう彼にはワーレンカが言っていることも耳に入らず、何も目に入らないんです。帰宅して、まず彼は机から彼女の肖像画を片付け、その後横になると、もう起き上がりませんでした。3日ほど経って、私のところにアフナーシイがやって来て、医者呼びにやらなくていいか、主人に何かあったようで、と言うんです。私はベリコフのところへ向かいました。彼は天蓋の下に横になって、毛布にすっぽり包まり、黙っていました。何かたずねても、「はい」か「いいえ」だけで、それ以上は言わない。横になっている側で歩き回っているアフナーシイは気落ちし、陰鬱な、深いため息をついている。アフナーシイは、酒場から出てきたかのようにウォッカの匂いがしました。

1ヶ月後、ベリコフは亡くなりました。葬儀への参列者は我々全員、つまり、両方の中学校と神学校の教師達です。棺の中で眠っている彼の表情は穏やかで心地よさそうであり、楽しそうですらありました。ようやく、二度と出なくてよい箱の中に横になれたことを喜んでいるかのような様子でした。そうですよ、彼は自分の理想へと到達したわけです！

まるでベリコフに敬意を表しているかのように、葬儀の日は曇っていて雨がちな天気で、私たちは全員オーバーシューズを履いて傘を持っていました。ワーレンカも葬儀に参列していて、棺が墓穴に入れられるときにはしくしくと泣いていました。私は、ウクライナ人女性は泣くか笑うかしかせず、その中間の感情はそうそう見られないということに気付きました。

実を言うと、ベリコフのような人物を葬ることは、大いに喜ばしいことなのです。墓場から戻る道すがら、私たちは控えめで落ち着いた表情をしていました。誰もこの喜びの感情を表に出したいとは思っていませんでした。この感情は、私たちが子どもだったくらい遠い昔に、大人たちが留守にしている間に自分たちが庭を1時間余り走り回って、完全なる自由を楽しんでいるときに味わったものに似ていました。ああ自由、自由です！たとえそれが自由のもつ可

能性への予感に過ぎなくても、微かな希望であったとしても、そういったものは魂に羽を授けてくれるのです、そうではありませんか？

私たちは上機嫌で墓場から帰ってきました。

ところが、1週間も経たぬうちに生活は元どおりになりました。通達で禁止されてるわけではないけれど、かといって全てを許されているわけではない、辛く、しんどい、訳のわからない生活です。要するに、よくはなっていない。それに実際、ベリコフが葬られたとしても、そういう箱に入った人間が未だにどれほどいて、今後どれくらい出てくることやら！」

「まさにそれですよ。」と、イワン・イワーヌィチは言うと、パイプをくゆらせた。

「まだどれほど出てくることやら！」と、ブルキンは繰り返した。

中学教師は納屋から出てきた。中背で、太っている、すっかり頭の禿げ上がった男で、腰のあたりまでくるほどの黒いあごひげをはやしていた。彼とともに2匹の猟犬も出てきた。

「月だ、月ですよ！」と、ブルキンは上を見上げて言いました。

既に夜中の12時だった。左手には村全体が見渡せ、長い通りが5キロほど先の遠くまでのびていた。全てのものは静かな深い眠りの中にあり、動きもなければ音もなく、自然界がこれほど静かであることが信じられないほどであった。

村の広々とした道と百姓屋敷、干草の山、寝静まったヤナギが月夜に目に入ると、気持ち落ち着いてくる。この静けさの中に、苦労や気がかり、悲しみから解放されて夜の闇に包まれると、魂は落ち着いていて悲しくて美しいもので、星々は魂を優しく、感動を伴いながら見つめていて、この世には悪意などなく、全てうまく行くと思えてくる。左手には村のはずれから平原が広がっている。平原は遠くの地平線まで見え、この広い平原全てが月光に照らされて、動きもなく、音も聞こえない。

「まさにそれですよ。」とまたイワン・イワーヌィチが言った。「我々が都会で蒸し暑さと狭苦しい環境の中で暮らしたり、要りもしない書類を書いたり、トランプ遊びをしたりしていること、これは果たして箱ではないと言えるでしょうか？あるいは、私たちが一生涯ろくでなしや不平を並び立てる人、愚かで暇を持て余した女性たちに囲まれて過ごしていること、様々な取るに足らない話を話したり聞いたりしていること、これは果たして箱ではないと言えるでしょうか？もしお望みなら、貴方に大変ためになる話を1つお聞かせしましょう。」

「いえ、もう寝る時間ですから。」とブルキンが言った。「また明日！」

2人は納屋に入り、干し草の上に横になった。そして2人がもう寝具に包まり、まどろみ始めたそのとき、軽やかな足音がぱたぱたと聞こえてきた...誰かが納屋からそう遠くないところを歩き回っているのだ。しばらくすると立ち止まるのだが、また少し経つと再びぱたぱたと聞こえてくる...猟犬たちは低く唸っていた。

「マーヴラが歩き回ってるんですよ。」と、ブルキンが言った。

足音がやんだ。

「嘘をつかれているとしても、見たり聞いたりしなければならぬ。」と、寝返りを打ちながらイワン・イワーヌィチは言った。「その嘘に耐えているなんて馬鹿だと周りから言われることだってある。侮辱や屈辱に耐えて、誠実で自由な人たちの側にいることを公言することもで

きない。そして自分に嘘をつき、ニコニコしていなくてはならない。全ては食い扶持のため、暖かいねぐらのため、何の価値もない何らかの官職につくためだ。全く、これ以上は生きていけん！」

「でも、それはまた話が別ですよ、イワン・イワーヌィチ。」と、教師が言った。「寝ましようよ。」

そうして10分ほど経つと、ブルキンはもう眠っていた。一方、イワン・イワーヌィチはずっと寝返りを打ったり、ため息をついたりしていたが、起き上がって再び外へ出た。そして、ドアのところに腰掛けると、パイプを燻らせ始めたのだった。